

四四年手稿断片「疎外された労働」

におけるマルクスの哲学思想(中)

——一、要素的形態としての第一規定——二、主体的原理としての第二規定——三、労働人間の生命的自己関係——(以上前号、以下本号)——四、Gattungのヘーゲル的概念——五、生命一般の場所即過程的な論理——六、人間種属の本来的な生命活動

梯 明 秀

四 Gattung のヘーゲル的概念

「疎外された労働」なる概念についてのマルクスによる「第三規定」の前半は、つぎのとおりである。

——資本制的生産過程における「疎外された労働は、人間から、一、自然を疎外し、二、自己自身を、彼自身の活動的機能を、彼の生命活動を、疎外することによって、それは、人間から種属(Ⅱ類) Gattung を疎外する。」(三〇六頁、s.87)——

ここに種属(Ⅱ類)とは、「我々の種属」unsere Gattung すなわち人類のことであり、この人類が人間から疎外されるということが、生産過程におけるかぎりのことからしては、疎外される人類なるものも、前節の所

論の帰結として、その種属的生命のことであり、したがって、われわれ個々の人間の人類的生命の無限性が疎外されるといふことである、とするほかないであろう。それにしても、その本質的規定が無限であるとされるところの生命とは、何であるか。この間に答えるにあたって、この生命を、人類に限定するまえに、生命一般として問題にすることが論理的であるとすれば、われわれは、まず眼を広く生物の世界に向けねばならないであろう。そしてマルクスも、「第三規定」を定立するにあたって、後節において分析的にみてゆくとおり、いまだ資本制的に疎外されるにいたっていないところの、人類の本来的な生産活動における自由な姿を展開するのであるが、この展開には、ヘーゲルの観念論的な生命観を止揚した唯物論的生命観を、当然ながら前提しているのである。とすれば、「第三規定」の前半についての十分な理解をもつためにも、マルクスの、したがって、ヘーゲルの生命観にまで遡って、それらの理解と吟味とのために、やむをえず紙数をさかねばならないことになる。

1、マルクス「経済学と哲学とに関する手稿」Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844. 第一手稿 Erstes Manuskript の「疎外された労働」Die entfremdete Arbeit, —頁は、邦訳(マルクス・エンゲルス選集、補巻4)のもの、又は、Marx-Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Bd. 3のもの。以下同様。

まずヘーゲルの生命観についてであるが、その無限性の論理としての展開は『精神現象学』においてなされており、したがって、マルクスも「疎外された労働」の「第三規定」において、ヘーゲルのこの無限性の規定を批判的に継承していることを十分に推定しうることに、後の叙述において読者の察知しえられるところであるにしても、この生命的無限性の体系的把握のためには、むしろ、彼の生命観が体系的に展開されている「自然哲学」における彼自身の叙述をたどるのを当然の順序とすべきであろう。それにしても、本稿で当面の目的とするものは、ヘーゲルの生命観そのものの分析的批判ではなく、その無限性の論理を展開した『精神現象学』とのマルクスの

『手稿』の関連にあるのであるから、かれの『自然哲学』からの引用は要約的に述べてゆくことにしたい。

さて周知のごとく、ヘーゲル哲学体系にあって、自然とは、「論理学」で到達したところの、概念と客観性と
の統一としての理念が、自己疎外におちいったかぎりの外面性だけのものであり、したがって、この単なる定有
の実在としての外在性から自己の概念を主体的に取りもどして、理念が再び精神として自己復帰するための過渡
的な意味しかもたないものである。しかしながら、理念のこの外面的定有にすぎない自然のうちに、すなわち、
その外的な必然性と雑多な偶然性とのうちに、われわれの理性が自らに信頼をもち、概念の眞の姿を洞察しうる
とするところに、彼の「自然哲学」が成立するのである。したがってヘーゲルにとっては「自然の諸形態は概念
の諸形態にすぎない。またしたがって、自然の実在そのものの自己運動による發展的諸段階として、それらの諸
形態が叙述されるのではなくして、逆に、概念の自己運動の發展的叙述に対応して、すでに実在している自然の
諸形態が、段階的に配列されるということになる。ヘーゲルによるこの観念論的転倒は、やがて批判的に吟味さ
るべき問題として後に残し、さしあたり、彼自身の發展的叙述をたどることから始めるならば、その主要な段階
は、第一に、それ自身で全く形成力を欠く物質性、すなわち、自然の抽象的な一般性、第二に、内在的形成力を
取得した物質的個別性における自然の特殊性、そして前二者の弁証法的統一としての第三の段階は、眞に個別的
になったところの自然、すなわち、主観性を確立したところの生命的自然である。自然概念のかゝる自己発展の
この最後の段階においては、「自然は、それ自らで生ける全体である」ということができる。そしてヘーゲル
は、右のそれぞれの段階の自然形態を、概念的に把握することを、順次、力学、物理学、有機体学と名づけたの
であるが、この最後の有機的物理学を、その概念的把握の対象が、単に生命の一般的な形像 *das allgemeine*

Bild des Lebens の *チキ* のものであるか、その特殊化したものにすぎないものであるか、さらに、この両者を総合的に止揚して真に主観性を確立した個別性であるか、によって地質的有機体と、植物的有機体と、そして動物有機体とに区分する。ヘーゲルが「生命を、死せる自然の真理である」というとき、この動物有機体においてこそ、この命題の意味は十分に發揮されうるとせねばならないが、生命一般としても、個別的な無機物質の統一の実体の意味をもたねばならないのである。しかし、いまだ主観性を確立していないところの他の生命形態は、たとえば植物的有機体は、この統一の機能を実現しながら、これを自らの力として自己のうちに定立するにいたっていない。であるから形式的な主観性であり、環境への生命の単なる特殊化にすぎないのである。その形態の各部分は、全体の諸契機として真の有機体を構成する以前にあり、時として孤立的に個別的であり、その個別的な物質代謝も単に化学的である。そして全体としての形態も、幾何学的図形や結晶的規則性に近い。要するに、物質的個別性から主観性への解放は成就されておらず、客観的な定有形態とその生命の実体とが直接的に同一なのである。すなわち、外的自然に特殊化的に応化しているだけであって、この自然的環境のうちにあって、自ら主体的に適應するという積極的な活動を、植物的有機体においては見る事ができない。ところで、この生命の実体が自己のうちに区別され定立されるにいたるとき、すなわち向自有的な自己関係が生命活動のうちに見られるにいたるとき、ヘーゲルのいうところの主観性は、具体的となる。逆に、生命の特殊化的定有形態にとどまるかぎり、動物もまた、なお普遍的実体を自己のうちに反省的に区別して定立するにいたらないものとして、その生命活動そのものは、いまだ真に個別的なもの、個性的なものになっていない単なる特殊性であると言わなければならない。要するにヘーゲルは、このような生命概念の实在形態を、すなわち生命の理念を、動物有機体

のうちに見たのであり、その前提として、有機的自然を無機的自然から区別する規準としては、概念の主観性ということが定立されているか否かにあるとしたのである。

ところで、この主観性は、ヘーゲル哲学の全体系にあって、疎外された精神としての自然一般からの、自己恢復の最初の契機であるわけであるが、この規定性の十分な展開を成就するまでには、不十分なる規定性にある前段階を經由せねばならない。かくして、現代の鉱物学、地質学、地理学、気象学、等々の研究対象になっているところの地殻的諸現象をも、ヘーゲルは一括して鉱物有機体とし、それらが個別的な物体を要素としながら、なお諸要素と異なる高次の全体を形成している点で、そこにヘーゲルは、合目的々な生命の形象を見る。そして、この自己形成の活動は、無機物理学の最後の段階にある化学的現象、たとえば燃焼性、中和性、親和性、等にも、すでに見られうるのであるが、これらは未だ、合目的々な主観の存立を推定せしむるところの形象を呈していないとして、有機物理学を地殻的諸現象から始めたのである。にもかゝらず。彼は、また、生命の一般性としてのその形象を、死滅せる生命の形態と呼んでいるものであるが、とにかく、この一般性から、その特殊化、さらに両者の弁証法的統一としての個別性という論理によって、植物における自己保存としての主観性を経て、動物における自己感覚としての主観性にまで、生命概念の自己展開を、あたかも、實在的生物の对象的な自然史であるかのごとく叙述しているのである。しかし、これが、現実の生命史でなく、生命の概念史にすぎないことは、改めて注意しておかねばならない。

さてヘーゲルは、動物における生命概念としての主観性について言う。——「動物は、偶然なる自己運動をもつ。というのは、その主観性は、あたかも光が、重さから離脱した観念性として自由なる時間であるごとく、実

在的外面性から切りはなされ、内的な偶然にしたがって、自分自身で或る場所を目ざしているからである。これに関連して動物は音声をもつ。というのは、その主観性は、実在的な観念性として時間空間の抽象的観念性を支配するものであり、その自己運動も、自己自身における自由なる振動としてあらわれるからである。それは動物的温熱をもつ。温熱は、形態の持続的保持において、部分の独立的存立と凝集との不断の解消過程としてある。

さらに、個別的な態度として、中断されたる融合をもつ。とくに感動 *Gefühl* をもつ。この感動こそは、その規定性において自己に直接に普遍的であり、単純に自分の側に留り自己を保持するところの個別性であり、規定された存在の実存する観念性である。²⁾——動物の感覺性 *Sensibilität* は、ヘーゲルの説くまでもなく、まことに、動物が、自己自身に留まり自己保存と再生産を続けるための契機であるだけでなく、外界の無機的自然に働きかける同化作用の端緒でもある。動物は、個別生命として、個別的な自然的物体に対立するのであるが、この対立を止揚せんとする同化作用は、まず感覺的な認識に始まるほかないし、その実践的活動においてのみ成就されるのである。この実践的態度において、動物は自分が外的自然から否定されているということを感ずる。にもかゝらず、この否定に抗して自分の外物にたいする関係、すなわち慾望を、確認せんとする衝動をもっている。

ところが、この外的自然との対立を、単に自己の制限 *Schranke* としてでなく、自分のうちにおける欠乏 *Mangel* として感ずるところに衝動がおこるのであるから、衝動とは、外的対立を内的矛盾として把握しているかぎりの自己運動である。このように、自己自身の矛盾を自己のうちにもち、そしてそれに耐えうるところのものを、ヘーゲルは主観とよび、この内在的矛盾のゆえに、動物における主観性の、したがって動物的生命の、無限性を主張しているのである。この衝動は、動物において本能とよばれているが、いまだ本能的衝動であるがゆえに、動

物の自己矛盾的な生命的運動は、偶然的であることをまぬがれていない。しかし生命とは、かゝる本能的衝動によって、外的に対置された自然を支配しうる一般的な力である。この同化作用とよばれる活動において、動物は内に摂取した無機物質を有機物質に転化することによって、自己自身に反省的に復帰し、すなわち向自有的に自己関係しているのである。この本能的衝動の「充足は、理性的である」とヘーゲルはいう。——「外的差別に向っていったこの過程は、有機体の自己自らの過程に転化する。そして、その成果は、ただ諸手段を調達したというだけのものでなく、諸目的の実現であり、自己との合一である」——これが、まさに動物の同化作用をつじての自己保存ないし再生産、すなわち、主体的な適応現象にほかならないのであるが、このような外的自然との適応過程において、動物は「自己の活動の終端と所産とが、すでに最初から根源的に自己のうちに有るものであることを知る」⁵⁾。すなわち、この活動において動物は、はじめて、自分自身であるという確信をもち、さらに自己の主観性に秘んだ概念に外的定有をあたえているのである。このことが、ヘーゲルによって理性的であるとされたところであるが、ここでは、動物の単なる主観性は止揚され、それは同時に客観的なものとなっている。すなわち生命は、動物的有機体において、理念としての自己を表現している。——このように「自己自身と合体した生命の概念は、具体的一般者すなわちGattungと規定される。それは、主観性の個別性にある関係と過程とにおいて現れてくるものである」⁵⁾——ここで、ヘーゲルのこの言葉に接して、彼の哲学において「類」（＝種属）Gattung⁶⁾なる語が何を意味しているかを、始めて明瞭に理解しうる時機にきたとすべきである。

²⁾ Hegel, Encyclopädie des Philosophischen Wissenschaften, Zweiter Teil, Naturphilosophie. (Lessons Ausgabe),

§ 351, S.311.

3 *ibid.*, § 365, S.322—3.

4 *ibid.*, § 365, S.322.

5 *ibid.*, § 366, S.323.

6 マルクスによる *Gattung* なる用語は、ヘーゲルから由来している。この語においてヘーゲルが意味せしめたものが何であるかについては、次節において明かにされることであるが、ここに引用された言葉によっても明かなように、生命の具体的普遍性として規定されている「類」は、哲学の領域で普遍性 *Allgemeinheit*、特殊性 *Besonderheit*、個別性 *Einzelheit* の意味におおつて一般に使用される類 *Genus*, *Gattung*、種 *Species*, *Art*、個 *Individuum* とつう相互関連にある諸範疇の一つとしての類ではない。この類としての範疇の特殊な適用であつても、この範疇だけのものでもない。この範疇の相互関連が、形式論理的な包摂関係であるか、辨証法的関連であるかにかかわらず、これらの諸範疇は、如何なる対象の事柄にも適用しうる相対的な形式であるにすぎない。しかるに、ヘーゲルの右の用語は、それが具体的普遍としての論理構造にあるかぎりでは、辨証法的な相互関連にあるこの相対的な論理形式の意味も具えていることは勿論であるにしても、それだけでなく、さらに内容的な規定として生命にかかわつたものでなければならぬ。だからと言って、現代の生物学が生命一般を、種 *Species*, *Art*、属 *Genus*, *Gattung*、綱、門というように分類するばあいの属の意味に理解することも不可能である。なぜなら、かかる分類学の範疇としては、形式論理的な包摂関係になるほかにいものとして、具体的普遍という辨証法的な構造が喪われてしまふからである。むしろヘーゲルとしては、生命一般を辨証法的な論理構造によつて理解しているかぎりにおいて、生物分類学上の属 *Gattung* に限定せず、その一切の諸範疇を内包的に一括した普遍的ものとして、これを類と名づけ、これを *Gattung* に意味せしめたとすべきであらう。本文に引用してあるように、ヘーゲルは「自然哲学」におおつて *Gattung und Art* として、生物学の分類をそのまま適用しているかのようでもあるが、属 *Gattung* 以上の、綱、門の範疇は使用していない。そのかぎりでは、属以上の凡ての包摂的な範疇を一括したものとすべきであるようだが、しかし、他方、これを区別された下位範疇としての種 *Art* の規定も、現代生物学における種の規定のように厳密でなく、単に普遍的生命の特殊化したものという程度である。しかも「精神現象学」の叙述においては、ただ個別的形態と普遍的媒体ないし実体との相互関連のみが問題にされ、この動的関連の辨証法においては、特殊性としての種の役割は無視されている。この点から見れば、ヘーゲルが *Gattung* と四四年手稿断片「疎外された労働」におけるマルクスの哲学思想(中)(梯) 一五九(九三一)

呼ぶばあい、この種をも含めて属とともに、すなわち個体以上の一切の上位範疇を一括した普遍性、一般的生命を、いみせしめて見ても、論理的内容の理解に誤りは生じないのである。

このような理由を前提して、Galtung の訳語を、単に「類」とすることが必ずしも正確であるとは、わたしには思えない。というのは、「類」とすれば、それに必然的に関連する「種」の範疇を連想すべきであるにもかかわらず、その必要は必ずしもないからである。しかも、単に「具体的普遍」の論理構造だけの意味でなく、かかる構造の「生命の実体」を意味せしめるところに、ヘーゲルの Galtung なる語の正確な用法があるからである。この「生命的な具体的一般者」ということを伝えさえすれば、訳語は正確なのであるから、わたしは、普通の字書に出ている「種属」なる訳語を、従来からも使用してきたし、本稿においてもなおこの訳語を踏襲しようとおもう。ただし、「種属」なる訳語は、生物学的分類の用語としての二つの範疇、を重ねたものとして、何か生命的なものを印象づけてくれるからである。ただし、この「種属」の訳語は、人類学上あるいは社会学上に使用される、血縁による共同体としての「種族」Stamm と混同されやすいが、この混同の誤謬なることは明かであろう。

無数の動物個体を自らに含み、したがって同時に、如何なる動物個体にも潜在している生命一般——すなわち具体的普遍としての類（≡種属）的生命——は、最初は「主観の個別性とのあいだに即自的に存在する単純なる統一にあり、主観の具体的実体をなす」ものである。この単純なる統一の原始的分轄（≡判断）として、主観における普遍的生命の否定性が向自有的に自己関係するとき、個別的生命は、単なる定有的実在性のまゝで未だその自然性を脱しえない直接性にあるかぎりでは、死滅のほかはない。死滅しないかぎりにおいては、この動物個体は、その自然的制約を克服して新たな形態を獲得するだけの実体的な生命を、自己の主観のうちに確保しているとせねばならない。かくて分割は再び統一される。要するに、受動的な応化の状態にとどまるか、積極的に適応的な態度にでるか、この動物個体の生死をつうじて、具体的普遍性にある生命一般は、合目的々に自発自展するのである。生命一般が自己の潜在的規定を漸次展開して、その定有的な形態をますます具体化してゆき、

そして複雑になったこれらの諸類型すなわち多様な種 *Arten* を、同時に包摂するという生命概念のこの概念的な自己運動を、ヘーゲルは「類的過程」 *Gattungsprozess* と呼んでいるのであるが、その即自的な過程は、生命の概念的発展の前段階的形態としての植物においても、当然ながらヘーゲルによって論述されていたところのものである。理念としての生命の自己実現が、主観における概念と客観的実在との弁証法的な統一と分轄との交互作用をつうじて、成就されるとするヘーゲルの「自然哲学」のみならず全哲学体系を一貫した論理として、それは問題のないところであらう。

さて、動物におけるこの「類的過程」であるが、これについてのヘーゲルの叙述を要約すれば次のごとくである。——(α)、「類と種」 *Die Gattung und die Arten*, (*ibid.* 3368) ——即自的に有る一般性としての類 *Gattung* は、衝動的本能によってであるが、新なる環境へ合目的々に適應する生命活動をつうじて、幾多の種 *Art* に分化する。各々の種は、自己を他者と区別し、敵対的に他者を否定しつつ自己を保存するがぎり、それぞれの種に属する動物個体は相互に生死を賭する。——(β)、「性的關係 *Das Geschlechts-Verhältnis*. (3369 ~ 3370) ——しかし類は、本質的には、統一的実体であるがゆえに動物個体を相互に両性關係によつて結合 *Begattung* をせしめて「生成した類としての性なき生命」を新たに生じ、——(γ)、「個体の疾病 *Die Krankheit des Individuums*, (3371 ~ 3374) ——以上の二つの関連において、類の自己媒介的な過程は前進するのであるが、この前進過程において、個々の動物は、無機的自然環境との闘争にさいし類的生命との不調和であることは、疾病の状態におちいるだけでなく、——(δ)、「個体の自己自らによる死 *Der Tod des Individuums aus sich selbst*. (3375 ~ 3375) ——さらに、「普遍性への彼の不適合性は、彼の根源的な疾病であり、生れながらの

死の萌芽でさえある。そして、これらの個別的な動物が普遍的な類的生命を自己に止揚しているかぎりでは、生命は無過程な習性に転化しているだけのことである。にもかかわらず、そこには「直接的な個別性と個体の普遍性との形式的対立は止揚されていて、自然的なもの終息がある」(S 375)。かくて「自然の最終段階の外性は止揚されて、そのうちにおいて即自的であるにとどまった生命概念は向自的になった」(S 376)のである。

——以上が、ヘーゲルの類(Ⅱ種属)的過程と呼ぶところの、生命概念の弁証法的自己展開の運動であるが、その要約的叙述を、ここに「自然哲学」によって試みたのは、それを分析的に批判する——このことは、次節の論述的過程において自ら成就されているであろう——ためではなくて、かかる具体的普遍としての論理的運動において、種属(Ⅱ類)的生命的無限性ということが論述されているところの『精神現象学』に移るための、予備的な知識としてのためであった。

五 生命一般の場所即過程的な論理

ヘーゲル『精神現象学』における具体的普遍としての生命一般の弁証法的な運動については、そのB篇「自己意識」第四章第二節「生命」の個所において、その全過程を総括して序論的に、まず次のように叙述している。

——「生命の本質は、一切の区別項が止揚されている存在としての無限性であり、純なる自転である。それ自身、絶対に不安なる無限性であるところの安らいであり、運動における区別項を解消せる自立性そのものであり、時間の本質としての自己同一でありながら、空間の堅固なる形態を所有せるところの単純なる本質である。

がしがしながら、この単純なる一般的媒体においては、区別項が区別項としてもまた存在する。なぜかというに、この一般的流動は、区別項を廃棄することによってのみ、否定するというその本性をもっているのであるが、区別されたものが存立をもたないばあいには、区別されたものを廃棄するわけにゆかないからである。実に、この流動こそ、自己同一なる自立性として、それ自身、区別されたものに存立を与えるもの、または区別されたものの実体であり、したがって、この実体においては、区別されたものは、区別された項および自分だけである部分として、存在する。〔二四八―九頁¹⁾〕

1、ヘーゲル『精神現象学』（邦訳上巻）二四八―九頁。以後「」で括った頁数は、すべてこの同書のものとして統一しておく。

ここに「単純なる、絶対に不安なる、一般的流動としての媒体ないし実体」と規定されているものは、まさに「自然哲学」において見てきたとおり、地殻的現象をも含めての生命一般のことではなければならないから、それは、抽象的な単なる生命概念ではなく、具体的に定有的実在をもつ理念としての生命であり、したがって、具体的一般者の論理構造にあることは明かである。そして、区別項といわれているものは、この理念としての生命の定有的形態そのものであるところの生物個体のことであり、そして、これをヘーゲルは、生命的無限性の第一契機と呼んでいるのである。そうすると、右に引用した文章は、要するに次のような主張を叙述したものとすべきである。すなわち、「絶対に不安なる活動」にある「単純なる一般的媒体」としての生命一般は、自己のうちに生物個体としての区別項の存立をもっているかぎり、すでに無限定ではないが、生物個体相互の区別を自己の純なる運動の契機として自己媒介的に限定したものとするにいたるかぎりにおいては、それは流動的な実体となっ

ている、という生命一般の全体的な運動を、叙述したものである。そして、この運動の全体の過程がヘーゲルの生命的無限性であるわけであるが、この生命の全運動過程は、ヘーゲルによれば、三つの論理段階を発展的に経過する。

まず最初に、a、その即自的段階についてヘーゲルは述べている。——区別項としての「第一の契機において形態は存立する。すなわち、形態は自分だけで存在するものとして、または限定されていながらも限界なき実体として、一般的なる実体に反対して登場し、この流動的実体との連続を拒否し、そうして自分は、この一般者のうちに解消などしているのではなく、むしろ、その非有機的自然からは分離し、この自然を消耗することによって、自己を保存していると主張する」(二五〇頁)。——要するに、地殻的生命の契機としての非有機的物質を摂取排泄する生物個体の同化作用を、ここに生命的無限性の第一契機として、ヘーゲルは述べているのであるが、このように第一契機としての生物個体の諸形態を、空間的に自己のうちに存立せしめている一般的媒体は、その論理構造において単に場所的であることは明かであろう。すなわち、この物質代謝としての個体の有限な生命過程は、実は、「一般的なる流動的媒体」としての生命において、「離れ離れに定立された形態」であり、そこに「安定され」、そして、主体的に、この「形態の運動または過程としての個体的生命となる」のである。しかしながら、b、——この同一の事柄を、個体的生命形態が一般的流動的媒体の自己限定による客体的な区別項にすぎなかったと見られうるばあいには、この「単純なる流動そのもの」は、単なる媒体ではなくして自己媒介的に区別を存立せしむる活動の主體的な実体である。そしてヘーゲルは、この場所的な一般的媒体ないし主体的実体を、生命的無限性の直接性、すなわち、その第二の契機とするのである。ところで、第一の契機としての区別さ

れた項は、最初においては、一般的媒体における主体的な自己自身による存立であつたのであるが、今やこの媒体が実体となつて主体性を發揮しているがために、區別項は、この実体が自らの單純なる流動性を維持するために、仮りに定立されたもの、たゞ廃棄するためにのみ存立せられたもの、仮象存立にすぎないものになっている。すなわち主客の關係は、こゝに顛倒している。これが全運動の第二の向自的段階である。

——「自立的なる諸項は自分だけで存在する。だが、この自分だけの存在は、むしろ直ちにこれらの項が統一のうちに復歸することであり、そして、この統一もまた同じように、自立的なる諸形態へ分裂することである。統一が分裂しているのは、統一が絶対に否定する統一、または無限の統一だからである。そうして統一が存立するがゆえに、區別項もまた統一においてのみ自立性を得るのである。形態のこの自立性は、形態が分裂したものであるがゆえに、限定されたものであり、他のものに対するものであるかのように見え、したがって、このかぎりにおいては、分裂の廃棄は他のものによつて行われる。がしかしながら、この廃棄は形態自身のうちにもまた存在する。なぜかというに、右のごとき流動こそ、自立的なる諸形態の実体であるが、この実体は無限であるがために、形態は存立しながら分裂し、すなわち自分だけの存在を廃棄するからである。」「二四九—五〇頁」——

このように生命の主体性が絶対否定的な一般的媒体の側にあるばあいには、區別された自立的諸形態すなわち第一の契機は、自己の存立において「區別は自己によつて存立するのではないという事実」を抑制せんとしてるのであるが、第一の契機のこの努力そのものにおいて第二の契機は、同時に、右の存立を區別項自身のうちにおける無限性に主体的に隸屬せしめているのであり、したがつて実体となつていのである。ところで、形態が

自らの存立においてこの存立そのものを廃棄し、同じことであるが逆に、実体が自らの区別においてこの区別を廃棄するという生命一般の、この絶対否定的な運動過程は、事柄自体としては、そこに第一段階の媒体の場所的性格を何ら止揚しないところの、依然として単なる「絶対に不安なる動揺」でしかない。要するに第三者としてのわれわれが、あるいは受動的な媒体と見、あるいは能動的な実体と見ることによる差別が、そこにあるだけのことではない。これにたいして、c、——仮象的存立にある区別された個別的諸形態が、今や非有機自然という静止的媒体を消耗するところの生命あるもの *Lebendiges* として、自立的主体となって現象する次の段階にすゝめば、第三の即且向自的に具体的な段階となると、ヘーゲルは言う。すなわち、この一般の実体として場所的無限性にある単純なる動揺、すなわち、先に主体的自立性にあつた第二の契機は、逆に第一の契機に再び隷屬せしめられるべき他のものの位置に転落しているからであり、にもかゝらず、それと同時に、一般の実体もまた、この自立化した個別的主体の存立即廃棄の弁証法的運動によって、自己を時間的に同一として持続しているからである。かくて、この第三の段階では、生命の場所的無限性も過程的な無限性に転化するにいたるとヘーゲルは言うのである。すなわち、この段階についてヘーゲルは次のごとく叙述している。

——生命の無限性の外化されたこの段階では、「消耗されるところのものは、本質であり、そこで一般者を消費することによって、自己を保存し自己自身との合一の感情を得ている個体は、実にこれがために、この個体があつてもって自分だけで存在する所以の他者との対立を廃棄する。個体の得るこの自分自身との合一こそ、実に区別項の流動であり、または区別項の一般的解消である。しかしながら反対に、個体としての存立の廃棄もまた同じようにこの存立を生産する所以である。なぜかというに、個々の形態の本質、一般的生命、および

即自的なるものは、それ自身においては単純なる実体であるがために、他者を自己のうちに定立することによって、自分のこの単純性または自分の本質を廃棄し、すなわち単純性を分裂するが、かく区別なき流動を分裂することこそ、個体を定立する所以であるからである。そこで、生命の単純なる実体は、自己自身を諸形態に分裂すると同時に、この存立せる区別項を解消するものである。ここにおいて、運動全体の先きに区別された両側面、——すなわち、自立性に要する一般の媒体のうちに離れ離れに安定して立てられた形態化と、生命の過程とは、互に他のものに帰著する。すなわち、後者は、形態の廃棄であると同一のこととして形態化であり、そして前者すなわち形態化は、項に分つことであると同一のこととして項を廃棄することである。」「二五
— 二頁 —

しかしながら、この第三の発展段階にあつて生命の過程的無限性が、形態化と過程化との循環的な相互的帰一化という論理において動いているかぎりでは、——詳しくいえば、その形態化の点において具体的現実性をもつといえども、この形態化を媒介にした全体的な過程そのものの論理は、今や単なる「不安なる動揺」にすぎなかつた直接性の段階と、同一ではないにしても、自己媒介的に形成する形態を止揚してゆくさまの、当の実体そのものが、最初の単純性と自己同一的であるにとどまつて、質的に規定性の複雑化を何ら加えてゆかないものであるかぎりでは、この生命的実体は、依然として同質的な一般の媒体としての場所的なものにすぎないとされなければならない。形態化を媒介にした自己運動としては、それは、単なる自己同一にある連続性ではないが、したがって発展と呼ぶべき運動であるにしても、種の形態化による非連続をつうじての連続としての自己同一を堅持していたものとは言ふことはできないであろう。したがって、そのかぎりでもまた依然として最初の即自的な単

純性を喪失していいとせねばならない。なるほど、生物個体の諸形態を離れ離れに存立せしめているにすぎなかった第一段階の一般の媒体は、また諸形態からも離れた単純なる流動性にある生命一般にすぎなかった。それは、形態の即自的なエレメントすなわち存立地盤にすぎなかった。そして、このエレメントが自ら流動的であるために区別を定立し、そして定立された区別において区別を解消するという単純なる循環のいわば運命的な反覆が、第二段階における場所的生命の無限性であり、かかる無限的生命の統一の全体でもあったわけである。しかし、この単純なる統一における生命的全体が、その区別を定立する契機において、形態化という外的自立性をもつかぎりにおいては、自らのこの外化において疎外し、個々の生物個体の有限なる生命過程に現実化するほかなかった。ところが、このばあいヘーゲルが、この形態化がそのまま形態の解消であるというだけの弁証法によって、生命過程のその無限性を保持するとかぎりでは、それは、最初の即自的な場所的生命の無限性を何ら止揚しておらず、したがって、同質的な全体性の単純なる一般的動搖に復帰しているだけのことである。ただヘーゲルは、それが、向自的な復帰を媒介しているかぎりのものとして、単に即自的な無限性ないし全体性そのままではなく、向自にして即自なるものとして、自己発展的な過程的生命の全体性ないし無限性に転化していると主張しているだけのことである。

——具体的な「生命とは、最初に述べたところのもの、すなわち、生命の本質の直接的なる連続と堅固とでもなければ、存立せる形態、または自分だけで存在せる形態、または自分だけで存在する分離的なものでもなく、形態の純なる過程でもなく、それからまた、これらの契機の単なる集成でもない。そうではなくして、生命とは自己を発展しながら、この発展を解消し、この運動において自己の単純性を維持する全体である。」(二

とヘーゲルも言っている。すなわち、この第三段階の叙述においても明かなことであるが、今までの論述からして、われわれは次のごとく結論することができよう。すなわちヘーゲルは、過程ないし発展ということ形態化にのみ限定し、形態の解消においては最初の場所的な一般的媒体の単純なる無規定の流動性に復帰するものであると説いたにすぎなかった。なるほどヘーゲルは、彼の主張としては、形態化とこの形態の解消の過程の全体を、生命的無限性の一般的過程としていることは事実であるにしても、これは種の形態の限りなき転換過程としての生物進化、すなわちダーウィンの展開したごとき時間的な発展としての対象的な自然史に、妥当しうる論理ではないであろう。それはただ、有限な生命の個別的形態化とその解消との過程を媒介にしたところの場所的生命の、かかる運命的な悪循環的無限性にとどまる絶対的な動揺としての全体的過程性にすぎないのである。

すべて生物は、地球の上に生活し、地殻的諸現象の諸規定に制約されている。そして、この地殻的環境への適応関係において、自己の体制に特性ある形態をそなえるにいたる。しかし、各自のこの体制の特殊化は、各自の生命力が環境に能動的に適応したかぎりの所産であるから、ここには、客体的環境と生物的主体との相互作用が見られねばならない。これらのことは現代の生物学の教えるところであるが、いま、この相互作用を適応の側面から見るならば、生物が生活するということは、環境的自然のうちに差別的に散在する——実は因果的に関連しているのであるが——実在的な諸規定を、自己のうちに統一してゆく過程であるということができた。したがってヘーゲルも、この環境的諸規定を媒介的に止揚する生物の活動性に、ヘーゲルは無機的自然から区別されるべき

「主観性」を見たのであるが、かかる止揚に成立し、またその止揚の根拠である統一的な全体性を、個別的な生命力とすることに、ヘーゲルも変りはない。しかし、この同一のことを、逆に地殻的自然の側面から見るということは、ヘーゲルには不可能であった。すなわち地殻的自然は、生物を制約しているだけでなく、その存立のための根拠でもあるのであるから、有機的生命の物質代謝による存立としての外的諸規定を、媒介的に止揚するという個別的過程は、それ自体、統一原理を地殻的自然そのもののうちに無自覚的に追求している過程であるとも、見ることができるのである。すなわち地殻的自然を、生物主体の外的に関係する単なる対象の実在界とする立場から離れて、生物自体がこれを自己の存立根拠として自己のうちに於いて見て、そして、この自らの存立根拠へ反省的に自己関係する立場に、この逆の見方は移っているのである。このとき、環境的諸規定の媒介的止揚としての生命的統一の過程は、地殻的自然そのものが、自己の外面的諸現象を止揚して、この現象的外面に直接せる動物の主観性を媒介することによって、それらの統一原理としての自らの本質的内容に自己反省する過程とということになり、したがって、この地殻的全内容が本質的に統一されるまで、かの生命による反省的過程は終息することも不可能となるであろう。ここに考えられる生命的過程の無限性こそを、われわれは始めて真に具体的な生命概念であるとせねばならない。ところで、このような生命観こそはマルクスの主張していたところのものであることは、次節においてやがて論証されるはずであるが、いまこゝに、このことを端的に推察せしめるマルクスの言葉を引用して見るならば、

——「自然、つまり、それ自身が人間の肉体でないかぎりでの自然は、人間の非有機的な身体である。人間が自然によって生きるということは、とりもなおさず自然が人間の身体であり、人間は死ぬまいとすれば、自然

によって絶え間のない前進を続けなければならない、ということである。」(三〇五—六頁、s. 87)²⁾——

この叙述には明かに、一個の自然物としての人間の自然全体への反省的關係、したがって、自然自体の人間の生命活動を媒介にした自己關係の論理が秘められている。この論理は同時に、動物の生命活動において自然自体が向自的に自己の本質的実体へ反省的に關係する論理でもなければならぬ。しかるに、これに反して、ヘーゲルの動物において見た主觀性は、このような地殼的諸現象を統一する客觀的に實在する実体原理を、自己の本質として自己のうちに於て見るというような、向自的の自己關係を許さない觀念性そのものであった。このような觀念性を敢て真理として強調するところに成立したところのヘーゲルの觀念論にたいし、生命的主觀性をつうじた客觀的實在そのものの自己關係を、承認する唯物論にあつては、このばあい地殼的現象の外面的世界に存立する生物個体は、各自の生命的統一としての全体性が、特殊なる形態において制限された内容そのものであるほかないかぎりでは、その無限の生命的自己關係の過程を遂行するためには、自己の制限的形態を廃棄してゆく、すなわち、その制限的内容に死して全体的内容に生きることがなければならない。この「生きんがために死ぬ」という自己矛盾が生命的必然性である。かくて、生物は個体に死して種に生き、種に死して属に、綱に、門に生きて、全体として生命を無限に展開せんとするのである。これが生物の進化である」³⁾。この生物進化における無限の生命過程は、このような生物個体の形態轉換をつうじた非連続の連続の過程として、その生命内容をますます質的に複雑化してゆくのである。こゝにおいて始めて、生命的無限性は、ヘーゲルのごとく場所的ではなく、過程的なものとして展開されていると言ふことができるであろう。しかしながら、この限りなき諸形態を區別して定立してゆく綜合的演繹ともいふべき進化の過程を、必然化するところのこの根源の事態は、かえって、

地殼的全内容を統一にもたらさんとする生命の具体的普遍性、すなわち動物の主観性そのものにあるのであるから、生命の無限な自己展開の真実の過程的なるもの、すなわち、動物の主観性に於てあるもの、したがって、その普遍性の場所に於て可能であるとせねばならない。かくて、外的自然への形態化がそのまま地殼の本質への反省であるというこの自己矛盾的な主観性の動的統一は、場所を媒介にした過程、非連続の連続という論理構造をもっているのである。

2、前掲の第一手稿断片「疎外された労働」(Marx-Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Bd. 3, 邦訳マルクス・エンゲルス選集、補巻4)。

3、拙著『社会の起源』五八一―九頁。なおここに展開されたマルクス主義的自然観は、拙著『物質の哲学的概念』における諸論文に一貫して、一步一步その確立のために追求されてきたものであるが、その反省的自己関係のための主体性の契機については、『資本論の弁証法的根柢』における「労働過程の弁証法」および「人間労働の資本主義的自己疎外」の二篇によって、ようやく説明されるにいたったものである。

要するに、マルクス主義的には、無限の形態転換の過程そのものを媒介して、生命は、自己の同一性を維持する全体として、すなわち非連続の連続の論理において、場所的即過程的なものとして無限であると考えねばならないのである。このような空間的契機として外的自然を止揚しながら時間的に発展する過程的生命を、ヘーゲルは、その観念論的立場に制約されて、ついに考えるにいたらなかったにしても、ともかく、即且向自的に具体的な生命を、形態化の過程に媒介された具体的な一般者と考えていた。そのかぎりにおいて、ヘーゲルは、形態化のために区別された諸契機の止揚に成立せるこの統一的全体を、たとえそれが単に場所的な一面性にとどまっていたにしても、とにかく、その具体的一般者の論理構造のゆえに、「種属(=類)Gattung」と呼ぶことができた

のである。そして、マルクスが「疎外された労働」の「第三規定」において、「人間から疎外される」とした「種属（Ⅱ類）」も、まさにヘーゲルの右の概念の批判的継承であったわけである。

六、人間種属の本来的な生命活動

ヘーゲルの『精神現象学』における「種属（Ⅱ類）」の規定は、つぎのごとくである。

——「最初の直接的なる統一から出発し、形態化と過程という契機を経て、これら両契機の統一に、したがって再び最初の単純なる実体に立ち帰ったのであるから、この復帰した統一は、最初の統一とは異なる統一である。かの直接なる、また存在だと言明された統一とは反対に、この第二の統一は、これらすべての契機を止揚されたものとして含める一般的なる統一である。すなわちこの統一は、単純なる種属（Ⅱ類）であるが、この種属（Ⅱ類）は、生命自身の運動においては、自覚的に、かかる単純なるものとして顕現していない。むしろ、この結果においては、生命は、自分以外の他のもの、すなわち、生命をかかる統一または種属（Ⅱ類）と認めている意識を、指示する。——しかしながら、種属（Ⅱ類）を種属（Ⅱ類）として認め、しかも、それ自身、自覚的であるところのこの他の生命、すなわち自己意識は、最初には、自分がこの単純なる本質であることのみを自覚し、そうして純なる自我 *reines Ich* としての自分を対象としている。」（二五三——四頁）——

ここでヘーゲルは、生命的自己関係から自己意識への移行の弁証法を展開しているのであるが、それによれば、まず種属とは、生物個体の存立するための生命の形態化と、この形態化における個体的生命の過程における、一切の区別された諸契機を止揚した統一であるが、これは外在化した生命が、自己の本質的実体としての単純な

動的無限性すなわち生命一般に、反省的に自己関係することである。このばあい、場所的な具体的普遍的論理構造にあるこの生命一般は、個々の生命を統一するものとして有ると、単にわれわれ第三者が言うだけのものでも、また個々の生命が全体的無限性のそれぞれの部分として動揺しているところの直接性だけのものでもない。すなわち先に述べたヘーゲルによる概念的発展の第二および第一の何れの論理的段階でもなく、第三の発展段階にあるものとして、部分は契機となつて新なる全体を構成しているのであり、個々の生命は否定的に止揚されて生命一般が媒介的に現出しているのである。にもかかわらず、この生命一般ないし動的無限性のかゝる絶対的な否定性は、個々の生命の外に向自的に対峙して存立するのではなく、個々の生命の内に現存するだけのものとしては、なお直接的なものであり即自的な有り方であるにすぎない。このような一般的な統一が「純なる自我」である。すなわち「純なる自我」とは、個々の生命と生命一般との區別における直接的同一性のことであるし、個々の形態の内における即自的な生命的無限性、すなわち単純なる生きた普遍的統一である。この単純なる生命的無限性としての普遍的統一は、個々の形態を媒介的に止揚していながら、止揚した契機に直接的であり即自的である流動的な全体であるところから、また種属（Ⅱ類）と呼ばれうるのである。すなわち「純なる自我」とは、ヘーゲルにおいて、種属的生命のことである。「純なる自我」の実体的内容が種属であり、種属的生命の形式的な統一原理が「純なる自我」である。だから動物種属も「純なる自我」を即自的にもつということができ、これが無機的物体から自らを区別するとされる主観性であったはずである。また、したがって、個々の動物が主体的であり、環境に能動的に応化しうる所以である。

さて、この純なる自我、単純なる種属的一般者、ないし統一原理としての生命的実体は、個々の形態における

生命過程にたいし、いまだ他のものとして自己を外的に顯わに定立することをせず、ただ、そこに即自的に潜在しているだけの内的なものであるかぎりでは、ようやく第三者すなわち哲学者の「意識を指示」して、その意識に現象し認識されることを要請している論理的段階にとどまっている。このばあい、われわれ第三者の意識が「生命をば一般的統一または種属（＝類）として認める」だけでなく、一步すすめて、個々の生命自体が一般的統一としての生命的無限性を認める第三者の意識を、自己のうちに定立するにいたったとき、言いかえれば、自己のうちにける即自的な無限性が一般的自己統一として個々の生命自身によって意識されたとき、単純なる種属ないし純なる自我は、「自覚的に顯現した」ことになる。この自覚の段階においては、無自覚的な段階における個々の生命の否定的な自己関係、——「我は種属である」ないし「個々の生命は普遍的なる生命一般である」、——は、その直接的同一性にすぎなかつたのにたいし、この最初の同一性に孕まれていた区別の顯現することによって、直接的自己関係の潜在的否定性が向自有的に自立して、自己の定有的な個々の生命形態に他のものとして対峙することになる。言いかえれば、個々の生命形態は、一般的な種属的生命を自己のうちにけるものとして定立し、それを自己の本質的実体として意識することになる。すなわち、直接的な生命的自己関係は、すでに自己媒介的な生命的自己関係、すなわち意識された生命的自己関係、したがって自己意識に転化しているのである。この自己意識的な生命的自己関係が、人間の生命の自己関係である。

以上が生命的自己関係の、その直接的段階からその自覚的段階へ發展する、ヘーゲルによる弁証法的過程であるが、それは、動物的生活の人間の生活への自然的転化の論理として唯物論化されうるものでもある。これについてマルクスも次のごとく述べている。

——「動物は、その生命活動 *Lebensätigkeit* と直接に一致したものである。それは自己を生命活動から区別しない。動物とは生命活動である。人間は彼の生命活動そのものを彼の意欲および意識の対象とする。彼は、意識的な生命活動を持っていて、被規定性と直接に一致しない。ゆえに、人間を直接に動物的生命活動から区別するものは、意識的な生命活動である。まさにこのことよってのみ、人間は一個の種属の本質なのである。つまり、まさに人間が一個の種属的実在(＝本質) *Wesen* であるからこそ、かれは意識的実在(＝本質) *Wesen* であるだけである。いいかえれば、彼自身の生命が彼にとつて対象なのである。この理由からしてのみ、彼の活動は自由な活動である。」(三〇七頁 S. 89) ——

しかしながら、人間だけが、種属的な本質を反省するのではなく、動物もその種属的本質に生命的に自己関係し、純なる自我として存在していることは、前述のとおりである。人間は、かかる「一個の種属的実在」として、自己の本質的実体へのその生命的自己関係を意識的なものにするだけである。すなわち「意識的生命活動をするという一個の種属的実在」である。そのかぎり、意識的でない種属的実在は人間でない。したがって「意識的生命活動をすることよってのみ、人間は一個の種属的実在である」と言うことができるのである。そして、この「意識的生命活動」とは、意識的な生命的自己関係として、人間が自己の生命活動ないし生活々動を意識の対象とし、これを種属的な生命の無限性に止揚することをいみする。「この理由からしてのみ、人間の活動は自由となる」のである。この意識は、「純なる自我」の向自有的に定立されたものとして、そこにおける絶対否定的な具体的普遍性の場所的な自覚であらねばならない。このことは動物には存在しない。マルクスも言う。

——「種属的生活は、人間においても動物においても、物質的には、まず人間が動物と同じく非有機的自然に

よって生活することである。そして、人間が動物よりも普遍的であればあるほど、彼がそれによって生活する非有機的自然の領域は、それだけですます普遍的である。植物、動物、石、空気、光、等々は、理論的には、自然科学の対象や芸術の対象として、人間の意識の一部分を構成するが、それと同じように実践的にもまた、それらは、人間生活および人間活動の一部分を形づくる。……人間の普遍性は、実践的には、まさに、直接的生活手段である自然についても、また彼の生活々動の材料、対象、道具である自然についても、全自然を彼の非有機的肉体とするという、その普遍性のなかに現れる。」(三〇五頁、s. 87)——

全自然における諸対象を、表象として浮べることのできる意識の無限性は、しかし未だ観念的な抽象的普遍であるをまぬがれていない。諸対象は、単に、その都度々々の散在した諸表象の対象であることをやめ、これらの諸表象の関連的統一において思惟される対象となるとき、対象的全自然の領域そのものが普遍的なものとしてわれわれの意識のままに展開されるにしても、この普遍的な対象領域自体を、自己の本質的実体として、すなわち、自己のうちに於てある他のものとして定立し、それへの向自的な自己関係によって、意識が自己意識となるときにのみ、「全自然を彼の非有機的肉体とする」ことができるのである。そして、このときにいって始めて、意識の普遍性は、具体的になり、その絶対的否定性の絶対性を現実化するにいたっているといえるのである。単に対象を観念的に表象するだけの意識も、対象の否定に相違ないが、そして、その即自的な普遍性においては、如何なる対象をも映しうるだけの絶対性を潜めていることも事実であるが、個々の対象にたいしては、それは現実に相対的な否定性にすぎない。この現実に相対的であるにとどまる否定性を、現実に絶対的なものとして顕現せしめるものは、理論的意識でなくして実践的意識であり、生産的活動における意識である。

——「動物もまた確かに生産する。しかし、動物は、直接的な肉体に支配されて、したがって一面的にしか生産しない。ところが、人間は、肉体的慾望から自由に生産し、しかも肉体的慾望からの自由のなかで始めて真に生産する、すなわち普遍的に生産するのである。動物は自己自身だけを生産するにすぎないが、人間は全自然を再生産する。動物の生産物は、その物質的肢体に直屬するが、人間は彼の生産物にたいして自由に対立する。動物はその属している種 Species の基準と慾望とにしたがって形づくるだけであるが、人間はあらゆる種の基準にしたがって生産することができ、また、どのばあいにも対象にたいしてそれ固有の基準を付与することができる。したがってまた人間は、美という法則にしたがって形づくったりもするのである」（三〇七頁、S. 88.）。

肉体的慾望から自由に、普遍的な種の基準において生産するということは、人間が、自己の外在化し形態化した個々の生命の有限な定有的実在性から、向自有的に自己の本質的実体として種属的生命の普遍性を反省し、この普遍的な人類の意識の立場から、自己の存立のための実体的根拠としての对象的自然に加工し物を生産することを、いみする。かくして人間は、日常の生活を再生産するだけでなく、全自然を再生産してゆくことができる。

——「対象世界の加工というこの生産が、彼の制作的な種属的生活なのであって、この生産をとおして、自然は、彼の制作物、彼の現実態として現れる。だからして、労働の対象は、人間の種属的生命の対象化でなければならぬ。というのは彼が、意識のばあいでのように知的にだけではなく、制作的、現実的にも、自分を二重化し、したがって、彼によって作りだされた世界において自己自身を直観する。」（三〇八頁、S. 89）——
すなわち、人間が自己意識的な観念性にあるときには、外界の実在の対象を知的に表象する自己と、自己自身

を内部的に反省の対象にする自己との二重性に、彼はあるのであるが、制作的、現実的な生産的労働のばあいにも、この労働の対象としての全自然に直接し直観していると同時に、これに直接する人類としての自己自身を直観して、同様の二重化を彼は経験する。

——「それだから人間は、ほかならぬ対象的世界の加工において、一個の種属的实在（＝本質）であることを、始めて現実的に確証されるわけである」。（三〇八頁、s. 89）——いいかえれば「対象的世界の実践的産出、非有機的自然の加工は、人間が一つの意識ある種属的实在（＝本質）であることの、すなわち種属にたいしては彼自身の本質として、自分にたいしては種属的本質として振る舞う一つの实在（＝本質）であることの確証である。」（三〇七頁、s. 88）——

すなわち自己意識の人間の二重性ということは、理論的生活におけるばあいよりも実践的生活におけるばあいの方が、より根源的で真実である。なぜなら、全人類を自己の本質的なものとして自己意識する普遍性の立場は、全自然の再生産ということによってのみ現実には実証されるからである。そして、この全自然の再生産ということは、個々の自然対象を普遍的自我のうちには否定的に止揚するという実践的意識においてのみ可能である。このばあい、普遍性は絶対的な否定性であり、理論的意識におけるごとく単に観念的に、したがって抽象的にでなく、現実的に、したがって具体的に普遍的である。人間が、人間種属すなわち人類の立場にたつとき、自己意識的な観念性において自由な本質を発揮しうるのであるが、この自由な本質であるということの確証は、自己活動的な生産的労働における向自有的なこの具体的な普遍性の実力によってのみ与えられうるのである。こゝにおけるマルクスのこのような具体的普遍性は、ヘーゲルとともに同じく *Gattung* と呼ばれているものであるが、その

論理構造は既に異って規定されていることに気づかれねばならない。すなわち、対象的な全自然物を否定的に止揚するという点で、具体的普遍性は依然としてヘーゲルと同じく場所的であるにしても、その自己反省の内的対象を単に主観的な生命の場所的な流動に求めず、実在的な客観的全自然そのものの本質的実体に求めることによって、対象的自然の形態化をつうじた自己発展の過程的運動を成立せしめうるという点で、異っている。すなわち、単に流動的な一般の媒体としての場所であるに終るのではなく、自然の全体的な発展過程の可能なために不可欠の契機としての普遍的意識としての場所である。要するに、このような、全自然にたいする自己活動的にして自己意識的な向自有的自己関係は、観念論を成立さすためにヘーゲル自身の斥けたものであったが、これについて、マルクスは積極的な主張をなし、傑れた表現——これは前にも引用したところであるが——を試みている。

——「人間の普遍性は、実践的には、全自然を彼の非有機的肉体とするという普遍性のなかに現れる。自然、つまり、それ自身が人間の肉体ではないかぎりでの全自然は、人間の非有機的身体である。人間が自然によって生きるということは、とりもなおさず、自然が人間の身体であり、人間が絶滅せざらんとすれば、自然をつうじて絶えず前進をつづけなければならない、ということである。人間の肉体的および精神的生活が自然と関係している *Zusammenhang* ということは、自然が自己自身と関係しているということ以外の、何らの意味ももっていない。なぜなら、人間は自然の一部分であるから。」（三〇五—六頁、s. 87）——

この引用における最後の言葉「自然自体が自己自身と関係する」ということは、人間の意識的生命活動を媒介した自然自身の自己反省であり、自然自体の自己構成的な発展を可能ならしむる根拠である。この自然自体の向自有的自己関係による自然の主體的な自己展開は、自己を歴史的なものたらしめるものであるが、この自然史

は、その反省的自己関係が最初の直接性にあるかぎりでは宇宙史であり、この潜在的自己関係が顕現して定立されたときに生命的自己関係となり、生物史的過程を構成する。そして、この生命的自己関係が自己意識されるとき人間の生産的自己関係に転化し、これが人間種属の全社会史を構成するのである。かくて宇宙史、生物史、社会史は、それぞれ全自然史の三つの発展段階であって、この全自然史をつらぬいて反省即構成という自己矛盾的論理が動いていると言わなければならない。

人間種属だけが歴史を構成する実在（＝本質）ではないが、この社会史を成立せしめる論理を、なお詳述すれば次のごとくである。すなわち、個々の人間が自己の人間の生命の無限性を、自覚するという現実の自己意識的な向自有的自己関係は、論理的には、人間種属が種属的な自我において、自己の生命的実体の具体的普遍を反省的に定立し、その絶対的否定性において自己の非有機的身体としての对象的全自然を創造的に加工ないし変革する自由を獲得するということをいみしている。ここに人間種属の全社会史が構成され展開されるのである。このばあい、人間の種属的な、したがって普遍的な意識は、この社会史的段階をも含めての全自然史的過程を外から映すだけの外的反省の立場にとどまるかぎりでは、抽象的普遍であり、その現実的形態は一般に理論的生活、とくに科学的態度にすぎないが、「人類が絶滅せざらんとして、自然をつうじて絶えず前進せん」として、社会史を發展的に構成してゆくばあいには、自然自体の向自有的自己関係に添うた自己意識を、われわれは持っているのである。そして、このばあい、われわれの人類としての自覚における向自有的自己関係の対象は、具体的普遍にある生命一般の無限性である。しかも、この生命的実体の無限性も、ヘーゲルのいうごとく、「非有機的自然を自己の外に分離し、この自然を消耗する」（二五〇頁）形態化した個々の生命の単なる「一般的なる流動的媒

体」として、自らもこの非有機的自然を自己の外に分離しているところの觀念論的な場所的エレメントではなく、個々の生物の形態化における生命過程をつうじて、つねに非有機的自然と物質代謝して、全自然を非有機的体躯として自己の存立根拠とせしむる生命的な自己関係に内在的な無限性である。要するに、自然自体の客観的な統一原理を自己の本質的実体として反省するときの、種属意識の空間的な拡がりや時間的な深さの無限性である。このかぎりにおいて、この無限性は、悪循環的な流動一般にとどまるヘーゲル的な場所、個別的な形態から見て客体的にすぎない場所では決してなく、非有機的物質の絶えざる止揚において自己の生活内容を何処までも限りなく高めてゆく発展可能な過程を可能ならしむる主体的な原理としての、あるいは個別的形態に内在的な具體的普遍としての、場所的無限性でなければならない。これが生物進化のダーウィンの論理にたいするより深い真実の規定であるが、この生物進化の過程即場所的無限性を自己意識の内部対象とするところに、人類の種属的な自我が成立し、この「純なる自我」は、その自己意識的な場所的觀念性において、自然自体の向自有的自己関係を自らの実質的内容としているものとして、自己活動的な現実性のある歴史的統覚となっているのである。これが、人類が地殻の上で、自然の主人として真実に自由であるという現実の姿の論理的内容とすべきものであり、したがって、この現実の姿にたいする論理的解明となるものでなければならない。そして、この解明において、人類の社会的発展においては、人間の意識は、科学的であることよりも哲学的であることが、論理的に以前であり根源的であることが、主張されているのであるが、この主張が同時にマルクス自身の立場のものであることを、読者はここに承認しうるのであろう。かくして、読者はマルクスの次の言葉を、その論理的内容においてのみならず、その方法論的な意味においても十二分の深さにおいて味うことができるであらう。

——「人間は一個の種属的實在（＝本質）である。それは、彼が、実践的にも理論的にも、彼自身の、および、その他のものの種属を、彼の対象とすることによってばかりでなく、また、そして、——これは同じ事柄の単に異った表現にすぎないが、——彼が現存の生きた種属として、自分自身に臨むことによって亦、彼が一個の普遍的な、したがって自由な本質として、自分自身に臨むことによって亦、そうなのである。」（三〇五頁、

S. 87.) ——

ここには、人間の人類としてと本来的な向自有的論理構造が、十分に唯物論的に分析されたいうえでの簡潔な表現において、典型的に叙述されているのを見る。この叙述をもって単純にヘーゲルのにも共通に理解しようとすることは、この叙述の背後に潜む唯物論的な全自然史の概念を、したがって生命的自己関係にたいする前述してきたごとき唯物論的な把握を、したがって亦、人類の種属的自由についての思想を、見抜く能力のないことをいみしていると言うほかはない。